

「最後の全中」に挑んで

東海大学付属第四高等学校中等部

嶋村 圭太

1. はじめに

今年の戦いをともに挑んだメンバーが入学したのが2013年4月。新たな決意を持って門を叩いてくれた彼らにとって、最も残念な出来事はその入学をした直後のことでした。本部より本校の募集停止の通達があり、それを誰よりも新鮮な気持ちで学校生活を始めたばかりの彼らと保護者に伝えるということに関しては、悔しさと苦しさと申し訳ない気持ちばかりで一杯でした。しかし彼らは通知を受けた後も誰一人として辞めることはなく、保護者も最後までチームを支援し続けてくれました。だからこそ、8月25日には一関市総合体育館のメインコートで絶対に勝利を分かち合いたいと思っていましたが、その夢は叶わず今年もベスト8という結果に終わりました。最後になりますので少々長くなってしまいますが、1年間のチーム作りや最後の中体連を振り返っていきたいと思います。

2. 新チームスタート～チーム作り

香川全中で1学年上の先輩達が戦いを終えた後、残った当時2年生の5人とスタッフでミーティングを行いました。3年生がいない中、改めてその人数の少なさを実感しながら、選手達と話し合っていると、彼らからは「覚悟はできている。」「今度こそ嬉し涙を流したい。」というような言葉がありました。「覚悟」と言っても、今までとは決定的に違うものが必要とされます。怪我はできない、インフルエンザにも罹ってはいけない、ファウルアウトもできない…挙げ出したらきりがありませんが、これまで控え選手を含めた総合力で勝負し続けた本校としては、全く別のチーム作りが必要でした。一抹の不安を感じながらも、札幌に帰ってから新チームはスタートしました。

日々の練習は、週の多くを高校生との練習に費やし、木曜日と高校生がいない時は中学生のみで行うというサイクルになりました。いつも高校生とは隣のコートで練習してきたので、これまでのチームもゲームや合同練習などは頻繁に行ってきましたが、圧倒的にその回数が増えました。前向きに考えると、これだけ毎日のようにレベルの高い高校生と練習できるチームなど他にない訳ですから、一人ひとりの技術やフィジカル面の向上を見ると本当にこの影響は大きかったと思います。

高校生のメニューでは一部の筋力トレーニングを除いてほぼ同じ内容を行い、どんどん中学生を鍛え上げる一方で、中学生のみで行うときは、シューティングや細かい技術練習、戦術的な確認（時間の使い方も含めて）などを行いました。これがその日によってやるべきことを明確にすることにもつながり、メリハリのある練習計画を立てることもできました。

目標としていたチーム像は、昨年度からスタートで出場していた④島谷と⑦篠澤が核に

なりつつも、「5人それぞれが攻める起点となることができるチーム」であったので、1年間のチーム作りを経て、選手それぞれに成長が見られ、背は低いですが、的を絞りにくいチームを目指し、ある程度実現することができたと思います。相手の特徴に対応して誰でも攻めて、誰でも合わせられるように、個々の成長と合わせの精度を向上することに努めました。ディフェンスにおいては、オンボール・オフボール両方で個々の1対1での対応を徹底することとローテーションで個々の役割を明確にすることを両立し、また試合の状況や体力を鑑みてディフェンスラインの高さをコントロールすることを目指しました。

3. 新人戦大会

新人戦全市大会では、私が3年生の海外語学研修のため不在で、政氏先生に指揮をとっていただき、私は現地から逐一結果速報を見るのみでした。熱いベンチワークで優勝に導いてくれたことに感謝するとともに、新チーム初めての公式戦で怪我なく終わることができてとても安心しました。

南大会は3日間で6試合という、全中と同じスケジュールであったので、改めてそのタフな日程を体験することができました。大量にリードした後の時間の使い方は、練習してきたとおりに実行し、ショットクロックをギリギリまで使いました。また、リスクのあるドライブなどもできる限り止めさせました。その戦い方が、時に相手チームにとって失礼になってしまったような気もして、心苦しい面もありました。しかし、5人で戦っていくためには仕方のないことだと心を鬼にして臨みました。

南北決戦大会では防寒や防菌に気を配る中、ある選手が移動中にバッシュを失くす（後日、調整練習でお借りした会場の生徒が見つけてくれました・・・）という非常事態が起ってしまったのですが、トレーナーや保護者の協力に対応し、無事に試合には臨むことができました。貸すことのできる下級生もいなく、失態を犯した選手を外すなどの指導もできない難しさも、この時に学びました。チーム全体にはいい緊張感が生まれましたが・・・。

新人戦の後はそれぞれ選抜での動きも入り、あまりチームでの動きはできませんでした。各選手が貴重な経験をしてきてくれました。私自身も北海道選抜のスタッフとして関わらせていただき、多くのことを勉強することができました。

4. 北海道カップから春季大会まで

北海道カップで久々の公式戦。道外強豪チームと対戦する絶好の機会、戦術的にもゾーンディフェンスなどを試すことができましたが、2日目の深川・妹背牛戦で⑥松原が開始早々に捻挫をしてしまいました。これまで公式戦では大きな怪我などはありませんでしたが、ついにその時が来てしまいました。この試合ではトレーナーを帯同していなかった上に、これまでアシスタントとして2年間チームを支えてくれていた政氏先生が離任した直後だったので、その瞬間は自分自身もかなり困惑しましたが、保護者にすぐ対応していただき、会場にいた役員の先生方も気にかけていただいて、大変助かりました。試合には案

の定敗れましたが、残った 4 人で最後までボックスゾーンを組みながら奮闘してくれました。その後の札幌中戦は不戦敗となり、最後の北海道カップは最下位で終了しました。

松原の怪我の状態は何とか春季大会に参戦できるまで戻りましたが、その春季大会でも今度は⑧矢本が準決勝の試合中に捻挫。軽めだったことが不幸中の幸いでしたが、改めて 5 人で挑むことの大変さを感じ、試合もギリギリの所で勝利しました。

春季大会後、一つの決心をしました。これまである意味、意地をもって 5 人で挑んできましたが、最後の大会を北海道カップの時のような不戦敗や棄権で終わるわけにはいけません。というわけで、助っ人に入ってもらい、安心して大会に挑もうと、テニス部員の内藤を誘いました。彼は真面目な生徒で普段からメンバーとも仲がよく、春季大会も観に来てくれたので、前向きに捉えてくれるよう説得した結果、快く 9 番のユニフォームを着ることを受け入れてくれました。テニス部顧問の先生とも相談し、定期的にバスケット部の練習にも参加してくれたので、選手達にも安心感が生まれ、思い切って取り組むことができるようになりました。

5. 中体連全市大会～全道大会まで

そして 6 人で中体連を迎えることとなりました。今大会では全日程で浅野トレーナーに帯同してもらい、夏場の戦いにしっかりと準備をして臨みました。やはり、未経験者とはいえ 6 人目が入ったことは大きく、大差の開いた試合では終盤に交替をしながら戦いました。数分間休むだけで、体力的なことだけでなく怪我のリスクを減らすことができたのは非常に大きかったです。決勝リーグでは負傷や過呼吸など、トラブルが相次ぎましたが、周囲の支えで何とか対応。さらに最終日には、これまで中学生の面倒を練習中から見てくれていた四高バスケット部のメンバーたちが応援に駆けつけてくれて、保護者以外にこれまでなかった大きな声援に背中を押されながら、4 日間・計 7 試合の長い戦いを乗り切りました。

全道大会からは、女子部員の 2 人にも正式にマネージャーとして裏方の仕事を手伝ってもらうこととなり、スタッフ体制も万全の状態、まずは全国大会出場権獲得まで一試合ずつしっかりと対策しながら挑みました。1 回戦の小樽末広中戦では出だしから走り続け、6 人目の⑨内藤にも出番を与えてあげることができました。続く 2 回戦の北広島東部中戦では、ベンチや応援席を含めたチームの一体感と勢いにリズムを作れない選手がいましたが、ベンチに戻ると仲間内で「自分で修正しろ！」と叱咤激励する姿があり、この 1 年間での成長と逞しさが見られました。全国出場をかけた準決勝の深川中戦では、序盤からディフェンスを強め、守りきって走ることと、チャンスを逃さず得点を重ねることに成功し、優位に試合を進めることができました。決勝の札幌中戦は、逆に前半で相手のリズムと会場の雰囲気からスタートしましたが、後半にスイッチが入り、1 年間競ってきたライバルとの最終対決にも何とか勝利で終わることができ、北海道第 1 代表の権利を獲得しました。優勝にこだわったのは、やはり全国大会での試合順を想定してのことでした。

これまでの全中参戦記にも書かせていただきましたが、第1代表であれば休憩時間が確保できる試合順になる可能性が圧倒的に高くなるので、特に今年のチームの特性としては欠かせないことであったので、優勝することができて一安心しました。

6. 全国大会までの準備

今年の会場は岩手県ということで、暑さ対策についてはあまり心配していませんでした。しかし、3日間で一瞬も油断のできない6試合を戦うことを目標にしていたので、体力面でさらに強化する必要がありました。そこで、高校生の外練習と一緒に参加させてもらい、練習の終盤に短距離・長距離を含めて追い込むことができました。これまで全国大会前にはそこまで走る練習は多く取り入れませんでした。佐々木睦己先生のアドバイスの下、最初に強度を強めて、徐々に緩めながら調整していったので、選手達は（嫌そうな顔をしながらも）一生懸命取り組んだことで、大会中も自信を持って走ることができていたようでした。

組み合わせも決まり、スカウティングもしましたが、とにかく今年の場合は怪我をせず迎えることが重要だと思っていたので、無事にいいコンディションで大会に挑めたことが最大の準備だったと思います。

そしていよいよ岩手に入り、大会の日を迎えました。公式練習や開会式を見ると、あまりの人数の少なさとマイペースで調整する姿が若干浮き気味でしたが、彼ら自身は先輩方にこれまで全中につれてきてもらっていたお陰で、会場の雰囲気や飲み込まれるようなことはありませんでした。自分達のリズムで、落ち着いて試合の日を迎えることができました。

7. 全国大会予選リーグ

迎えた初戦の相手は中国ブロック代表の総社西中学校（岡山）でした。第2代表ではありましたが、第1代表が優勝候補筆頭の玉島北中学校だということを考えると、全く油断ができない相手でした。事前の情報通り、アウトサイドの選手それぞれが1対1の強いチームで、序盤はリズムを掴みにくかったですが、篠澤が安定してリバウンドや合わせなどで地道に加点し、後半でペースを上げて徐々に差を広げる、自分達らしい展開をすることができました。

続く岩成台中学校（東海ブロック第2代表、愛知）戦は、特に⑮の2年生センターが高さと能力を兼ね備えた選手で、中に絞ってもガードの⑤を中心にアウトサイドの確率も高いチームでした。立ち上がりはオフェンス面では松原と⑧矢本を中心にシュートを決めつつ、徐々に島谷が点数を重ね、バランスよく加点ができていました。ディフェンス面では相手のセンター⑮がアウトサイドからプレーを始めてくれたので、マッチアップした篠澤も苦勞しながらも何とか守っていました。しかし、徐々に⑮が中に飛び込んで得点を奪いに来るようになり、抑えようとする能力の高いフォワードの⑥やシューターの⑤を

中心に得点を許し、競り合った展開になりながらも、最後は59-69で敗れてしまいました。結果的に言えば高さに屈した形ですが、ベンチとしても篠澤の所に負担になりすぎないようにマークをいじったことが裏目に出たり、ファウルがかさんできてからどのようにコントロールし、上手くやり過ごさせようか指示を徹底できずに、反省ばかりの内容でした。苦しい場면을想定して準備してきたつもりですが、それをうまく引き出せないまま終わってしまい、予選2位通過となりました。

2位通過ということは当然、次のトーナメント1回戦から優勝候補と当たる確率が高くなります。私が前任の原田政和コーチから引き継いだ後に出場した全ての全国大会では1位通過だったので、組み合わせ抽選会も終始緊張しながら自分の順番を待っていました。結果、1回戦の相手は白子中学校（東海ブロック第1代表、三重）となり、当日敗れたばかりの岩成台中学校に東海ブロック大会決勝で快勝している強豪校との対戦となりました。

8. 全国大会決勝トーナメント

白子中学校の予選リーグは強豪ぞろいで、その戦いぶりは試合の合間に観ていましたが、それを偶然撮ってくれていた札幌中に貸してくれるようお願いしました。これまで札幌中とはずっとライバルでしたが、競先生とも「ベスト8で会いましょう！」と誓い合いました。本当に同じ北海道代表としてありがたい存在でした。

スカウティングをしても、個々の技術が高く、平均的にも高さがあり、長身ガードの④(185cm)を中心に抜け目のないチームでした。唯一、希望があるとすれば、岩成台中ほど決定的な高さの差はなく、ハードにディフェンスをし、コンタクトを嫌がらなければ逆に守りやすいのではないかということでした。

試合に入る前に、それまで調子の上まらない⑤古田の頬をつねり、無理やり表情をほぐしました。スピードを活かして相手の能力に対抗するには、普段から高校生にも走り負けない運動量を持つ彼の力が不可欠だったからです。すると、期待に応じて相手ディフェンスのスペースをドライブで切り裂き、得点と篠澤へのアシストなどで前半を優位に進めることができました。ディフェンスでは島谷が相手エース④とがっぷり四つで対決し、相手の嫌がる間合いを意識しながら守っていました。

しかし、後半に入ると相手はゾーンディフェンスに切り替え、それこそ嫌らしい距離感でこちらの足を止められてしまいました。ゾーン対策はしてきましたが、相手の平均的な高さに対して上手く攻めようとしすぎて、適するタイミングでスペースに飛び込む動きがあまりできずに打たされる形のアウトサイドシュートが多くなり、普段入るシュートも落ちてリズムを狂わされました。ようやく終盤になってそれが出始めましたが、第3ピリオドの得点はフリースローの2得点となり、逆転を許して第4ピリオドを迎えました。

合間に今大会アシスタントとして、U-18の関係で来られない佐々木先生の代わりに帯同してくれた佐藤文哉先生が遠慮せずにアドバイスをしてくれて、選手達もより柔軟に動くことができるようになり、第4ピリオドは島谷を中心に息を吹き返すことができました。

アウトサイドも徐々に入るようになり、さらに勢いをつけるためにゾーンプレスを仕掛けて、何とか同点で延長に持ち込みました。延長ではじっくり守りながらもポイントで古田の速攻と島谷の1対1で振り切り、何とか勝利しました。

続く2回戦は別府北部中学校（九州第1代表、大分）との対戦となりました。残念ながら札幌中との対戦にはなりませんでしたが、彼らの分まで絶対に勝とうと試合に入りました。昨年度も対戦しているチームで、当時からの主力メンバーの④と⑤を中心に高いシュート力と粘り強いディフェンスを持つチームでした。お互いの長所を潰し合うような守り合いのゲームで、点差の離れない一進一退の時間が続きました。途中、矢本が相手との衝突で目を傷めましたが、当然交替などするつもりもなく、本人も意地で試合に出続け、リバウンドやルーズボールを粘りました。こちらとしては④と⑤のピックプレーに対応しようと意識しましたが、要所でアウトサイドの⑫に合わせの3Pを決められ、流れを持っていききれない我慢のゲームとなり、2試合連続の延長となりました。やはり連続で延長となると苦しい展開となり、足を動かし続けましたが、相手エース④が苦し紛れに放ったシュートがリングに収まり、最後に前に出ましたがさらに相手に得点を許して44-49で敗退しました。

9. 終わりに

終わった瞬間は動けない選手達を慰めることで精一杯でしたが、ロビーに移って最後のミーティングをすると、これまでのことが全てよぎり、情けないことに私も共に涙を流してしまいました。負けても笑顔で気丈に振る舞うつもりでしたが、最後まで諦めないでくれた彼らの表情を見ると悔しさがさらにこみ上げ、耐えることができませんでした。

今思えば、やはり延長に持ち込む前の段階でしっかり試合を決められるチャンスは幾つかあり、「あの時こうすれば…」とかなりの時間が経った今でも思い出して考えてしまう時があります。後悔しても何も変わらないのは当然ですが、苦しい経験を糧にして、悔しい思いをバネにして今後の人生に活かしていこうと、普段から生徒達に伝えているように自分にも言い聞かせ、これから一指導者としてさらに成長できればと思います。

最後になりましたが、これまでジュニア連盟の一員として関わる中で勉強させていただいた指導者や関係者の皆様、対戦して下さった全てのチームの皆様や大会運営に携わって下さった生徒や役員の皆様、そして東海大四中の歴史を支えてくれた卒業生や保護者、スタッフの皆様のお陰で、指導者としてキャリアのない自分が掛け替えのない経験をすることができました。既に現在は高校の世界に身を移しておりますが、この9年間で学んだことを忘れずに頑張っていきます。本当にありがとうございました。